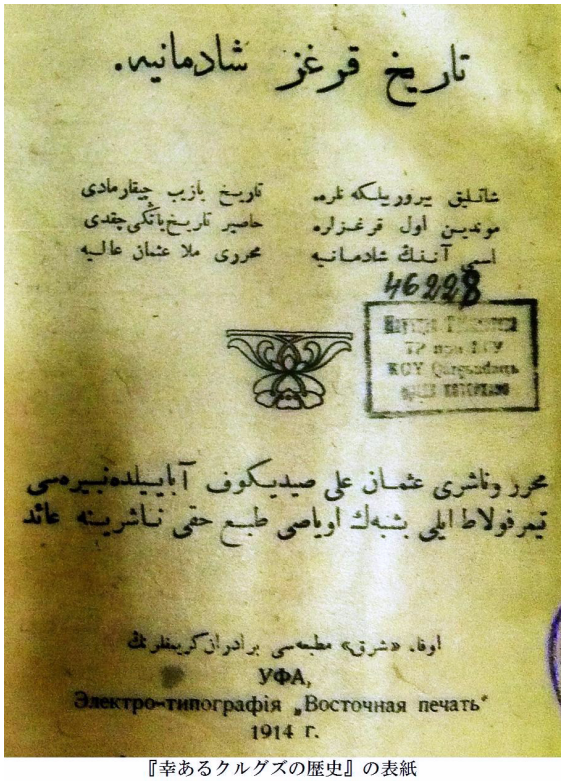
20世紀初頭におけるクルグズの歴史叙述
――オスマン・アリー・スドゥコフ『幸あるクルグズの歴史』を中心に――

秋山　徹

本報告は、クルグズ、オスマン・アリー・スドゥコフによって執筆された『幸あるクルグズの歴史 Ta'rīkh-i qirghiz-i shādmānīya』の検討を通して、20世期初頭ロシア統治下のクルグズ社会、とりわけ部族指導者層マナプの動向を考察することを目的とした。『幸あるクルグズの歴史』はオスマン・アリー・スドゥコフによってアラビア文字表記テュルク語で執筆され、1914年、ウファのカリモフ＝フサイノフ商会「東方」印刷所から出版された。著者オスマン・アリー・スドゥコフは、1875年に現在のコチコル盆地、当時の行政区画でいえばセミレチエ州ピシュペク郡アバイドゥリン郷に、サルバグシ族テミル支系のマナプの家系に生まれた。トクマク、ウチ・トゥルファンのマドラサを皮切りに、ブハラ、ウファに遊学した彼は1913年、処女作『クルグズ簡史 Mokhtasar ta'rīkh-i qirghizīya』を同上の印刷所から出版、翌1914年に本書が発行された。ソ連時代はフルンゼで教育に従事するも、1920年代末東トルキスタンに亡命し、1940年に同地で没した。



『幸あるクルグズの歴史』の表紙

ソ連時代、『幸あるクルグズの歴史』は階級的視点から「ブルジョワ民族主義」として断罪され、研究はおろかその存在すら黙殺された。しかしペレストロイカを契機に同書は見直されるようになり、1990年には現代クルグズ語転写版が出版された。このなかで同書は「最

初のクルグズ民族史」として評価され、系譜（サンジラ）研究の情報源としても利用されてきた。このような研究動向を踏まえつつ、本報告は同書を民族史という枠組みに位置付けるだけで満足せず、20 世紀初頭という時代の生成物、一つの歴史過程として捉えてみたい。いいかえれば、自身マナプの家系に属するオスマン・アリーが、マナプたちの権威を再構築しようとする、実践の一形態として本書を位置づける。このような問題意識にもとづきつつ、同書を公文書館史料や同時代資料から得られる帝政ロシアの公文書史料から得られるクルグズ社会の状況ともつきあわせながら検討をすすめることで、本報告は知識人研究と社会史研究、文学研究と政治研究の有機的接合をはかることを企図してもいた。

『幸あるクルグズの歴史』は、二つの部分から成り立っていた。第一部は 20 世紀初頭のクルグズをとりまく状況についての現状認識と覚醒を訴える、350 行におよぶ韻文で構成され（3–19 頁）、第二部はクルグズの指導者たちの系譜とその事績で構成された（20–134 頁）。とくに後者における系譜叙述の構造に着目し、それが創世記、テュルク民族史、クルグズ諸部族の系譜が接合される形で成り立っていることを明らかにした。『幸あるクルグズの歴史』は、書名それ自体が示すようにクルグズ民族史の構築としての性格を有するものであった。同書を執筆するために、オスマン・アリーは帝政ロシアの枠組みを超えて、新疆、フェルガナでの調査を実施していることからも、それが「クルグズ」という民族的枠組みを念頭に置いた積極的な主張・行動、すなわちナショナリズムの側面を有していたことは確かであり、カザフ、サルトといった他民族との対比において、民族意識の発露が認められる。

しかし、枠組みにおいてクルグズ民族史を志向する『幸あるクルグズの歴史』ではあったが、クルグズを単位とした排他的なナショナリズムの主張や行動はみられなかった。事実、『幸あるクルグズの歴史』が覚醒を訴える相手はクルグズに限定されてはおらず、カザフを含めた、緩やかな地域（セミレチエ、トルキスタン）が意識されていた。むしろ、その重点は、タガイ裔に連なる有力な部族指導者たちの系譜と事績の集積にあった。『幸あるクルグズの歴史』は、マナプ層の権威の実質上の低下を背景に、その体系的な系譜を作成することで、クルグズ民族というよりはむしろ、タガイ裔の傑出性と優位を、歴史的時間軸のなかで再確認し、再構築する性格を強く有していたと考えられる。系譜や伝承が卓越性の主張の根拠としての「イデオロギー」であることを踏まえれば、「歴史」や「伝承」における位置づけを通してマナプたちは権威の再構築を企図していたと評価することができよう。事実、同書は有力なマナプ、シャブダン・ジャンタイの「支配」の正統性を示す、いわば「王朝の書」としての側面を多分に有するものであった。

オスマン・アリーに見られる、いわば「歴史への志」は、彼だけの特異な現象ではなかった。それは、同時代の他のマナプたちの歴史実践だけではなく、クルグズの枠を超えた、植民地社会とりわけロシア人たちの動向とも密接に連関し、共振していた。1893 年から翌 94 年に

かけて、セミレチエ州そしてピシュペク郡で調査滞在した東洋学者 V. V. バルトリドの存在は、この時期に歴史意識が活性化したことを考える上で見逃せない。彼は、同地でロシア人の地元歴史（愛好）家や考古学者たちを訪ね、その活動を激励したが、このことはロシア人の歴史実践の活性化を促進していた。事実、オスマン・アリーが同書の執筆のために各地で系譜の聞き取りを開始した 1890 年代は、クルグズに関する学知収集の成果が相次いで発表され、ロシア当局主導で征服、併合に関する歴史記述と史料集の編纂が進められるなど、植民地社会全体として「過去」の想起が活発化した時代であったことを指摘した。

以上の考察から本報告は以下の諸点を指摘した。①『幸あるクルグズの歴史』がクルグズの手によって書かれた主体的叙述であることは確かだ。しかしその執筆の背景を辿ってみると、ロシア側の調査・研究「収集」行為とオスマン・アリーの歴史実践が共振関係にあった。②『幸あるクルグズの歴史』が民族意識を構築するための知識の共有・供給を意図して執筆された民族史叙述であることは確かだ。しかし同時代の現実において「クルグズ」という枠組みを動因とする積極的な主張・行動は決して一般的ではなかったのであり、ナショナリズムを鼓舞する書というよりは、シャブダンの「支配」の正統性を示す「王朝の書」としての側面を多分に有するものであった。③総じて、『幸あるクルグズの歴史』は啓蒙書、民族史、系譜といった様々な側面を併せ持つ書物であった。このような、時に相矛盾する要素が、オスマン・アリーという一人のクルグズによって実践され、一つの書物として著わされたことそれ自体が、20 世紀初頭という時代状況を如実に示していたと考えられる。今後は、オスマン・アリー以外の同時代そしてソ連時代初期のクルグズの言説にも光を当てつつ、同時代カザフ、ウズベク、タタール、ウイグルの言説との比較も行うことで、クルグズ近代史の理解を深めてゆきたい。

（北海道大学大学院博士後期課程）